

無作為抽出方式の市民参加の可能性

——市民討議会の実相と意義——

浦 谷 收*

1. 研究の目的

多様化している市民参加の手法において、近年開催されることが多くなっており、計画等の政策形成過程の中で参加者が積極的であらゆる場に参加する市民、あるいは利害関係者や専門家でなく、「無作為に抽出」された市民（ミニ・パブリックス）が、最低限度の情報は得ながらもゼロから討議をし、熟慮された民意のもとに案を作成する市民討議会に着目し、無作為抽出方式が自治体政策形成の場にどのように採用されるようになったのか、どのような政策のために開かれているのか、この方式が効果的に作用する可能性のある分野は何か、意見が政策に反映されているのか、されていないとするならばなぜか、どのような議論がなされたのかを事例をもとに詳らかにすることで、著者は前向きに捉えている無作為抽出方式の市民参加の質的観点からの有効性、今後の政策形成過程への意義について検討する。

2. 論文概要

本研究は、第1章において、政策形成過程における市民参加として、自治体で導入されている

様々な市民参加の手法についてまとめた。また、市民参加一般が抱える問題点についてまとめた。第2章において、熟議民主主義理論についてまとめた。熟議民主主義理論についての歴史の変遷について追った。「熟議」というキーワードは、日本においても、2011年3月11日に起きた東日本大震災以降頻繁に使用されるようになったものである。このような経緯もあり、近年盛んになっている無作為抽出方式を採用した市民討議（ミニ・パブリックス）の世界で行われている手法の分類をした。またそれらが、日本に持ち込まれどのように運用されたのか事例を紹介しながら論じた。そして、ミニ・パブリックスがサイレントマジョリティの参加を促す方法になりうることについて述べた。第3章では、日本で導入されているミニ・パブリックスの中でももっとも開催件数の多い、市民討議会について取り上げた。市民討議会がどのように日本に導入され、またどのような主体、テーマ、参加者の選出方法で行われているか、統計調査をもとにしながらかに明らにした。テーマはまちづくりなど無作為抽出された市民が話しやすい内容になっているなど、全国的な傾向をみることができた。また、参加者の選出方法については、完全無作為抽出という形を取らずに、一部作為的に選出している事例なども取り上げ、多様な市民討議会の姿をみることができた。第4章では、具体的な事例分析として、青森県五所川原市の市民討議会の事例を研究した。第3章での市民討議会の統計

* うらや しゅう 公共政策研究科公共政策専攻
修士課程修了

論文審査委員主査 磯崎 初仁

論文審査委員副査 細野 助博 工藤 裕子

調査によると、市民討議会が東北、西日本地域においては、2010年代までほとんど開催されてこなかった。そのような中で、五所川原市は2012年から2015年まで毎年開催されてきていることに注目し、調査するに至った。五所川原市の概要、そして五所川原市で行われている市民討議会以外の市民参加手法について概括した。そして、これまで4回開催された五所川原市における市民討議会について分析を行った。五所川原市では市民討議会参加者の8割が公募の市民参加経験がなかったが、

参加者の充実度は高く、市民参加に対する市民の意識が向上していることが明らかになった。また、討議内容も2014、2015年度は総合計画に文章化され、反映されている。このように、継続的な市民討議会の成果が明らかになった。結論では、五所川原市の事例をまとめ、そして今後の市民討議会のあり方として、他の市民参加手法との組み合わせや無作為抽出方式の運用について論じ、結語とした。